

# 銅劍銅鉞に就いて(六)

梅原末治

一一

上述の彌生式土器と關聯して銅劍銅鉞と密接な交渉のある遺物として次に石器の類を數へることが出来る。尤も從來紹介せられてゐる資料では、銅鉞若しくは銅劍が石器類と一のフンドをなして見出された事實はない様であるが、大正五年八月狹鋒銅鉞、細形銅劍併せて七口(兩者とも形式古き類多きを占む)を發見した筑前國板付宇北崎の遺跡に於いて、それ等を容れた甕棺のあつた同じ封土に磨製石斧、扁圓形石器及び磨製石劍片等の存した例があり、また中山醫學博士の調査に依ると北九州の銅鉞銅劍の出土地及び甕棺の埋没地には普通彌生式土器の散布が多く、且つ石器、石

屑を伴つてゐることが分明してゐる。中山博士は是等の現象からして兩者の間の密接の關係の存在を肯定して、進んで當代の文化狀態を論ずる一の重要な楔子として居られるのである。博士の右の見解に對しては人或は如上の例證が偶然二者の混在の場合にも生じ得ると云ふ見地から疑念を挿むなきを保し難いが、翻つて考へるに、近畿、中國、九州に濃厚な分布を示す彌生式土器は、其の最も特徴を發揮してゐる時期にありては、石鏃、石斧等の石製利器と共存し、我が内地に於ける石器時代所産の一大なる流れを代表するものであること、幾多の遺跡が如實に示す處であつて、疑を容るゝの餘地がない。然るに上述の銅鉞銅劍と

共存した小形彌生式土器は、同式の特徴の顯著なものを含み、また北九州で古式の銅銚銅劍を副葬してゐる甕棺にあつては、この高さ二三尺の大形薄手の甕を作るに就いて、製作上技術の一段進んだものであることを豫想せしむるにせよ、なほ石器と伴出する彌生式土器の特色を具へて、兩者の間に區別を附し難く、且つ此の種大形の甕は彌生式石器時代の遺跡から石器と共存の状態で見せらるゝこと、例へば尾張熱田貝塚に於ける如きものがある<sup>⑧</sup>。されば中山博士の得られた事實を以て單に偶發的の現象として取扱ふことは穩當ではないことになる。なほこれを後に述べる磨石劍の示す事實から見ても、兩者の密接な關係は到底否定し難いのである。

果して右の銅銚銅劍と石器類との共存が肯定せらるゝとせば、それが吾人の考察上に如何なる意義を持つてあろうか。云ふまでもなく銅銚銅劍の

行はれた時が他方に於いて石製利器のなほ存した時代に接觸するのを物語るものに外ならない。此の事は上來屢々引用し來つた中山博士の論著に繰返して説かれ、其の所論中非常な精彩を放つてゐる部分なので、今ま重ねて蛇足を加ふるの要を見ないわけである<sup>⑨</sup>。たゞ私は博士の主張せらるゝ歸結に對して、本論の考察上次の一事を記して置きたい。それは其の製作者の民族の問題は暫く除外するとして、互に接觸する二者中、一方の彌生式石器時代が廣く關西に分布して、繩紋式土器に對立する著しいものであることゝ、上來の記述からして、他の一の銅銚銅劍が本く處支那にあり、其の中で形式上古いものがこの接點に立つてゐる事實とであつて、これはやがて銚、劍の性質を推定する上に重要な一據點となるものと信ずるからである。

次に銅劍銅銚の或物と伴出する遺物中如上の石

器類と好對照をする鐵器に觀察を轉せむか。これまた中山博士の調査に依つて究明せられた點が多いのであるが、吾々は先づ朝鮮慶州入室里の遺跡に於いて其の最も確實な例證を見出すのである。

此の遺跡にあつては出土の銅鉾銅劍の上に鐵器の共存を示す多量の鏹の附着してゐるのみならず、其の遺物の一部分である處の劍身片と異形斧頭とは現に慶州保存會の陳列室に保藏せられて居り、また同時に出た馬鐸に鐵製の舌の垂下した遺品などがあつて、兩者並存の事實は太だ明瞭である。

不幸にして今實物は存在しないが、同じく鐵器の伴出した例として内地では對馬下縣郡高原村下ヒナタ及び豊前宇佐郡長洲町廟森塚に於ける鐵劍を擧げ得ると共に、別々ではあるが同一地域に埋没して多數の甕棺、若しくは石室群の内から出て兩者の關係を想定せしむるものに肥前三養基郡柚<sup>⑥</sup>氏、筑前須玖岡本村の北の遺跡及び後藤君調査

の對馬上縣郡佐讚白岳等がある。中で對馬白岳のは劍頭で形狀は後藤君の報文<sup>⑥</sup>に依つてこれを知ることが出来るものであり、柚氏のは劍身三口と傳へ、其の一は當時の屈書所載の圖に基くに、長さ一尺三寸五分(内莖長二寸五分)及幅一寸三分五厘、莖に目釘孔の一つある短い形のものであつたことが知られる。なほ銅鉾劍と鐵器との並び存したことは彼の大正十年四月に對馬佐護のクピルから銅鉾と共に出土銅容器に型持として鐵を用ひた痕の明かに存するものゝあることや、中山博士調査の北九州に於ける遺跡地帯に鐵滓の散布する事實をも併せ見る可く、當時鐵器の存在したことに就いては最早疑を容るゝ餘地はないのである。而して此の鐵器との共存の事實に對して、吾々の注意に上る點として其の遺跡が南鮮から北九州に互る古い形式の鉾劍を藏した墳墓の多きを占めて、他方石器の共存遺跡と年代上近い關係にあること

及び發見の鐵器其の物が利器の類で、特に大部分が大陸に基く處の多い劍身に屬するの事實を擧げなければならぬ。

既に上段に於いて石器と銅鉞銅劍との關係を肯定したが、こゝに吾々はまた其の鐵器と接觸してゐる事實を確めるのであつて、其の當然の結果として銅鉞劍の行はれた中心地域にあつては、古式のものゝ時代に利器として三種の質料の並び用ひられたことが肯定せられるのである。これを換言するならばデンマルクの學者トムゼンが提唱して、今や廣く學者の採用してゐる利器の質料に依る人類文化の三階段たる石、青銅、鐵の時代が、此の場合順を追ふて展開したのではなくて、銅器と鐵器とが相並んで石器の次に存在したのを物語るものである。そして發見の鐵器が銅鉞銅劍と同じく外來の性質を帯びてゐる點からすると、兩者の傳來が相次いで我が島帝國に此の特殊の現象を

呈したと見るべきであつて、當時の支那大陸の形勢を大觀する時この事は充分認めらるゝことゝ信ずる。

今他の考古學上の事實に就いてなほ少しく如上の關係を考察するに、南鮮及び北九州にあつては、こゝに問題に上つてゐる時代に、一方石器使用から直ちに鐵器の文化階級に入つたことを示す遺跡が存するのである。其の顯著な一例は云ふ迄もなく、中山博士の檢せられた筑前松原の砂丘上の遺物包含散布地であるが<sup>⑥</sup>同時に私は前年濱田博士に從つて前後一週間に互る學術的發掘を行うて良好なる成績を收めた南鮮の金海貝塚を指摘したい<sup>⑦</sup>。二者の遺跡遺物に就いては既に各其の報告が公にせられてゐるから凡て省略に従ふが、共に一方に石器があると同時に、他方鐵器鐵滓が存して、再者の並び行はれたことを知り得るものであり、且つ不思議にも兩遺跡共に王莽の貨泉が見出

されてゐて、其の過渡の年代がこゝに論じてゐる  
それと互に接近し、また支那の高い文化の影響を  
如實に示すのは、研究と看過す可からざるもので  
ある。

さて右の諸點を綜括することに依つて、吾々は  
本邦西半部の地域にあつては、石器使用の状態に  
あつた民衆の間に私の研究對象としつゝある銅鉾  
銅劍の如き利器が傳へらるゝと共に、相次いでま  
た鐵器が傳へられ、一時三者並存の現象を呈した  
が、利器の質料としてより優れた鐵は銅を壓倒し  
爲に銅製の利器が特有の發達を遂げ一の文化時期  
を劃するに至らないで、鐵器使用の時代に入つた  
經過の痕を辿り得るのである。同じ状態は吾々  
が、本州西半の如上の遺物と對立する銅鐸を考察  
する場合に於いても見らるゝのであつて、其の分  
布の中心區域である近畿地方の文化推移もまた同  
一であつたとせなければならぬ。これは本邦の

文化發達を考ふる上に重要視すべき事實である  
が、銅鉾銅劍其物の研究に取つても、本來利器た  
る性質の兩者が我が國に傳へらるゝや、段々それ  
が形式化して實用に遠ざかり、本來とは全く別な  
宗教的の性質を有するものとなつたことの因由に  
想倒することに依つて、其の一半の理由が、右の  
點にありとするの推測—少くも兩者に何等かの關  
係の存在を想像せしむるものとして興味なしとせ  
ないのである。

論じてこゝに至つて、然らば銅鉾銅劍は早く鐵  
器に壓倒せられたものとして、一般文化の上に影  
響する處が殆んどなかつたとすべきであらうか。  
吾々は轉じて磨石劍なる一種の遺物を考察するの  
必要を認めるのである。

註(1) 中山醫學博士「銅鉾銅劍の新資料」(考古學雜誌第七卷第  
七號)等參照

(2) 同「銅鉾銅劍並に石劍發見地の遺物」(同誌第八卷第八號第  
九號)所載表參照

(3) これは大正六年十二月上旬愛知縣學專門學校の佐藤助教授の行つた熱田具塚發掘に立會つた際實見したのであつて、甕棺に比す可き大甕が目層中に逆の位置に立つてあり、附近の同一貝層中から磨石斧片二個を發見した。まさに兩者の同一時期に屬するを明證する一例である。

(4) 中山博士「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就て」(前出)及び註(2)の論文等參照。

(5) 此の柚氏發見の遺物に就いては當時の地方誌の屈書に依ると、高臺下に數十個のほど相似た甕棺が埋没してあつて、其の何れもが内部空虚であつたが、「就中最モ大ナル一個ノ甕ニハ「クリス」型青銅ノ劍一個及磨蝕シテ僅カニ其ノ形ヲ認メ得ベキ鐵ノ直刀、實ハ劍である」三個(何レモ長サ一尺許)若干ノ米ト共ニ甕中ニ存在致居候」とあつて一見最も確實な共存例の様であるが、此の遺跡の發見後間もなく實地を踏査せられた谷非文學士に従ふと、銅劍と鐵劍とは各々別の甕棺から出たとの事であるから、こゝには後者に従つた。なほ確むべきである。

(6) 後藤守一君「對馬管見録」(考古學雜誌第十三卷第三號)參照。

(7) 考古圖集第十九集圖版及解説を見よ。

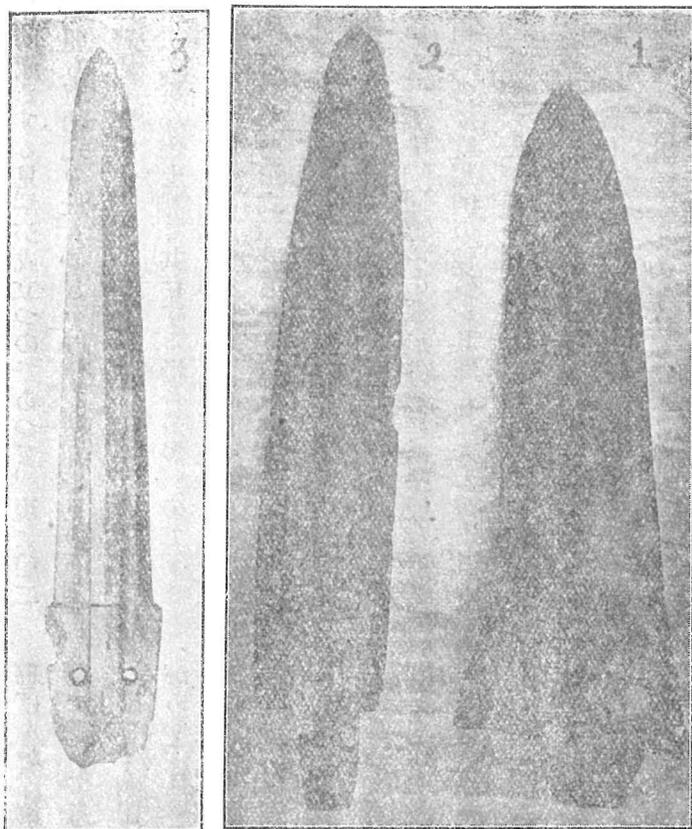
(8) 中山博士「北九州に於ける先史原史兩時代仲間期間の遺物に就て」(前出)參照。なほ此の遺跡に就いては近く考古學雜誌一三ノ一一にも博士の補記がある。

(9) 朝鮮總督府大正九年度古蹟調査報告第一冊所收「金海貝塚發掘調査報告」參照。

一三

こゝに磨石劍と云ふのは粘板岩を磨研して作つた一種の石器であつて、主として近畿以西、特に北九州、朝鮮の南半に濃厚な分布を示すもの、一面にて彌生式土器、磨石鏃、石斧等と共存すると共に、他方に於いて單獨出土の例も多い。此の種遺品の全般に互る考察は自ら別途の研究題目に屬するから、別の機會に譲ることにするが、形式の上からこれを觀ると其の間に四種の別の存することとは「嚮に鳥取縣下に於ける有史以前の遺跡」を論じた際に簡單な該遺品の聚成圖を掲げて指摘して置いた處である。高橋健自氏は其の後私の第一類に鐵劍形、第二類に有柄式、第三類にクリス形、第四類に有槌式と云ふ、便利な名稱を附けら

第十一圖 本邦發見磨石劍三種



れた。今ま簡單に一々の特徴を  
擧げると、第一類は身の断面菱形  
で鑄があり、また莖を有するもの  
が多く、二見鐵劍に似た類を云ひ、  
第二類は顯著なる鬮カマテがあつて、劍  
の下半が把握するに適する様に作  
られたもの、第三のクリス形は第  
十一圖の(1)に示す様に(豊前絲田  
發見)其の輪廓が銅劍のクリス形  
と一致した特殊の形であり、また  
第四類は形が同じく細形銅劍に近  
く、脊を挟んで相對した二條の樋  
のある著しい特徴を持ったもので  
ある。(第十一圖の(2)に示す丹波  
觀音寺出土品參照)

是等の石劍は石を質料としてゐ  
る點と、其の或物が磨石鏃、石斧

彌生式土器などと伴出することから石器時代の文化所産とする見解が成立つのであつて、現に第二類即ち有柄式の最も多きを占むる朝鮮發見の石劍は普通石器時代とせらるゝ、磨石鏃、磨石斧、石庖丁彌生式系素焼土器と共存する場合が多いので、また同時代のものとして一部學者の間に取扱はれ、銅劍に先立つ形式とせられてゐる次第である。

今まこれを形の上より觀察するに、第一の所謂鐵劍形の如きは形打製の石槍と頗る似通つた處があるのみならず、同形中の單形の類には堅緻な石質を以てゐて實用的の性質を具備したものがあつた。で、磨研の術が進むと共に石器の製作者が石槍から此の種の磨石劍を造り出すことは充分想定し得られる。然し乍ら上に舉げた四種の石劍のすべてに互つて、其の一々の手法を檢する時、私は中山、高橋兩氏等と共にどうしても磨石劍を以て純然たる石器時代の所産とする事の出来ないのを認

めるのである。次に簡單に其の所以の著しい點を舉げんか、第一の鐵劍形は暫く除外して、他の三類に就いて見るに、何れも特殊の複雑な形式を現はして、利器として自ら到達すべき形に遠いものがあり、且つ互の間をつなぐ遺品はもとより、鐵劍形とも關係の認むべき點がなく、各の發達の過程を全く徴することが出來ず、かへつて其の各類が銅製劍の諸形式に酷似したものを見出すのである。此の如きの現象は、簡單なる石器から技術の進歩と共に漸次發達して複雑形を生ずる場合の過程上果してあり得ることであるかどうかは今更多言を要しないと考へる。尤も當代の利器としては石製品の外に木、竹製のものゝ存在してゐたであらうと云ふことは現在の未開人の土俗から推測せらるゝ處であるから、右の點を考慮するの必要がある。如上の石劍の祖型また木、竹器に求むべきにあらざるか、或は銅、石劍兩者の共同の根

源がそれに遡るのではないかに思ひ到る次第であるが、如上の三類の場合、其の第二の式は支那の古式の銅劍に形極めて酷似し、<sup>(4)</sup>第三式は我がクリス形銅劍と同一形と見る可く、また第四の有樋式は大體に於いて細形銅劍の形式を襲ひ、中には銅劍其儘の形を示すこと第十一圖の(3)に載せた丹後日置村出土の如き例があつて、兩者の形の上の關係が餘りに密接で、同一根源から別途に發達した場合に見る類似とはなし難く、その何れか一が本で、他は其の影響を及ぼした時の外、かくの如きの酷似が容易にあり得ないことを示してゐるから、結局右の本竹器との關係をも肯定することが出來なくなる。既に私は前段に於いて我が銅劍銅鉞がもと支那の高い文化所産の傳へられて、漸次形の上に特殊の發達をしたものであることを論じた。右の見解に大なる誤りがないとすれば、其の銅劍銅鉞類が、石の利器として發達をした磨石劍

の形の影響を受け、或は其の形を移したとするが如きは、到底其の妥當なる所以を見出し得ないのである。なほこれを更に石劍の示す細部に就いて見るに、第二類の有柄式のものゝ如きは形の著しく便化したのみならず、脆弱な粘板岩から成つて實用に耐へられないものが多く、また第三第四の式の關に近く往々穿たれてある一雙の孔は雙頭圓錐形に屬し、其の穿孔の技術頗る進歩して我が上代の勾玉の頭孔に髣髴たるものがあり、器の製作、特に有樋式の臘の部分の作り等に金屬器使用の痕迹をさ々むるものと共に、是等の石劍の基く處の實は銅劍類にありしを物語る有力なる傍證となると信するのである。論じてこゝに至ると初に除外した第一類の鐵劍形に就いても形の著しく細手の大形となり、よく鐵劍の特徴を備へ、莖又は關に近く上述の第三第四の式と同一の穿孔を有する類に至つては同じくまた金屬器の影響を

想定してよいかと思ふ。此の點に於いて中山博士が筑前糟原郡香椎村發見の長さ一尺餘の此の種遺品を以て銅劍を模したとせられた見解<sup>6)</sup>は吾人の贊する處であり、また高橋氏が河内北河内郡山田村發見の莖に双頭圓錐孔のある鐵劍形に青銅器の影響を認めらるゝのにも一致する<sup>6)</sup>次第である。

以上は主として形式と手法の上から磨石劍の甚く處の銅利器にある可きを論じたのであるが、同様に石劍そのものゝ出土状態を調査するとまた頗る銅鉞銅劍のそれと相一致するものあつて時代の接觸を示すのである。例へばクリス形銅劍の顯著な豊前絲田の發見品は地下八尺許の處から彌生式土器、人骨と共に發見せられたものであり、上記

丹後の日置村及び河内山田村の石劍等は單獨に見出されてゐること。銅劍銅鉞の或物に見ると異なる處がない。更に石劍類の本邦に於ける分布を觀

るに、當代石器土器の製作に於いて優れた技術を有した關東奥羽を中心とする所謂繩紋式土器の分布區域に稀であつて、朝鮮北九州に最も濃厚で、畿内本州中部に及び、大體に於いて銅鉞銅劍の分布區域と一致する事實が、兩者の密接なる關係を物語るものであつて、これも石劍が前者の影響になつたことを示す有力な證據となると思ふ。併し是等の點は高橋氏が既に詳しく述べてゐられる處であるし、分布の詳しい表は聚成圖と共に近く別に發表の豫定であるから、今まは單に圖別に依る分布表を載せるのみで、他のすべてを省略に附することにする。

磨石劍各類分布一覽表

國名	第一式	第二式	第三式	第四式
	(鐵劍式)	(有柄式)	(クリス形)	(有繩式)
對馬	二	三	一	一
壹岐	一	一	一	一
筑前	一〇	六	二	一
筑後	二	一	一	一



傳へられた當時の南鮮及び西日本はなほ石器使用の時代であつたことを併せ考へると、吾々は磨石劍によつて銅劍類の當代民衆の上に與へた一の影響を見待るのであり、それが割合に數多く、且つ分布の範圍の銅鋳銅劍よりもや、廣い點で其の影響の程度と當代の民衆の文化の程度、進んでは彼等の外來の高度の文化に對する態度なごをも推し得られて、當面の銅鋳銅劍の研究上に深い興味を覺ゆるのである。

註(1) 同書第十章「遺物の研究」(六上)七一頁以下參照。

(2) 高橋健自氏「銅鋳銅劍考」(前出、第十一、石劍との關係の條)。

(3) 朝鮮總督府大正五年「度古蹟調査報告所 載島居博士の「平安南道黃海道古蹟調査報告書」に見ゆる處の如きは其の著しいもので、博士は其の八〇三頁以下に於いて有柄式石劍の石器時代遺物説を力説してゐられる。

(4) 尤も此の種石劍の祖型に就いては、別に土耳古式短劍が考慮せらる可きであるが、把握する部分が細くて只に節狀突起のある支那の古式銅劍は實際の使用に當り右の部分に革の類を纏いたこと、京都大學や京城鮎貝氏の藏

品に依つて認められるから、使用當時は餘程有柄式石劍に近い形であつたと察せられる。況んや有柄式には柄の部分に節を設けたものが存するのであるから、私は今右の見解を採る。なほこれに就いては近く別に詳述する機會があらうと思ふから、詳しくは其の際に譲る。

(5) 中山博士「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就て」(考古學雜誌八ノ三所載)參照。

(6)(7) 高橋氏「銅鋳銅劍考」十一、石劍との關係(前出)參照。

(8) 此の表は手許に集まつた資料から作製したのである。但し形式の明でない破片はすべて除外した表に表はれた數字が註(6)の高橋氏の論文所載のものに比して著しく多いのは、新資料の存するからである。その詳しい表は聚成圖と共に發表する豫定である。